

できごと

平成30年6月27日(水)に、当館会議室で子ども図書研究室講演会を開催しました。公益社団法人シャンティ国際ボランティア会の山本英里さんをお迎えし、『本、図書館の力～海外の現場から～』という演題でお話いただきました。(2ページ目にて、概要を紹介いたします。)

平成30年7月13日(金)に、県立中央図書館で平成30・31年度に渡って開催される、静岡県子ども読書アドバイザー養成講座の第1回目が開催されました。この講座は、地域で子どもと本をつなぐ活動をしている方の中から、リーダー

として、学校や図書館をつなぐコーディネーターとして、活躍される方を養成するための講座です。現在は県内32市町の計250人がアドバイザーとして認定されています。2年間で計6回の講座を受講します。今回は、子ども読書アドバイザーの概要やアドバイザーの役割についての説明の後、翻訳家の小宮由氏による基調講演もありました。

(3ページにて、概要を紹介いたします。)

◇イベント情報1◇

◆新刊サロンのご案内

日時：10月17日(水)、12月8日(土)、2月20日(水) いずれも午前10時30分～12時
会場：県立中央図書館 子ども図書研究室
対象：児童書に関心のある15歳以上の方ならどなたでも(中学生を除く)

◆平成30年度の新刊児童図書巡回展示のご案内

日時・会場：11月7日(水)・掛川市立中央図書館
11月9日(金)・静岡県立中央図書館3階 会議室
内容：両会場では約1,000冊の児童書を手にとってご覧いただくことができます。
対象：県内市町立図書館(含公民館図書室)職員及び小・中学校図書館関係職員のうち、現在児童図書の選書に実際に携わっている方
問合せ：県立中央図書館 TEL：054-262-1246 FAX：054-264-4268

◇イベント情報2◇

◆平成30年度第26回静岡県図書館大会

会場：静岡県コンベンションアーツセンター
グランシップ
日時：11月19日(月)
9：45～15：45
申込：申込用紙(県立中央図書館ウェブサイト・県内公共図書館で配布)に記入の上、来館、郵送またはFAX
宛先：静岡県立中央図書館 企画振興課振興班
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-1
FAX：054-264-4268
申込期間：9月19日(水)～10月19日(金)
※第3分科会は8月10日(金)～11月9日(金)

◆子どもの本に関する分科会

13：45～15：45
◇第3分科会 子どもの読書活動
テーマ：「しあわせを伝える絵本
～『くまのがっこう』にこめた思い～」
講師：あいはらひろゆき氏(絵本作家)
◇第4分科会 幼児・児童に対するサービス
テーマ：「絵本の記憶、子どもの気持ち
～大学生のレポートより～」
講師：山口雅子氏
(元学習院女子大学非常勤講師)

平成 30 年度 子ども図書研究室講演会

今年度は、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会事務局次長兼アフガニスタン事務所長・山本英里氏を講師にお招きしました。『本、図書館の力～海外の現場から～』と題した講演会でお話いただいたことを報告します。



浜 松市出身の山本氏が活動を始めたきっかけは、イギリス留学時に談笑する大学生の自分へ投げられた「日本人も戦争加害者」というアジア系女性からの何気ない一言だった。その後、初めての一人旅で北部タイへ行き、アジア各地、紛争地域の子どもの支援や、貧困問題に関心をもちつようになった。やがて困難な状況にある子どもたちの支援活動に関わりたいと思い、そのころ現地に事務所を構えて子どもを対象とした活動をしていた数少ない団体であったシャンティへ参加した。

シャンティの教育支援活動には、本や図書館活動が果たす役割として、教育の質の向上、ライフスキル（人間力、非認知的能力）をつける、心理社会的ケア等がある。これらの先に目指すのは、自ら考え社会課題を解決できる力を得ることで、子どもが子どもらしく伸び伸びと成長できる平和な社会を創造することである。紛争により教育を奪われた傷跡は大変深く、長期化する難民キャンプでは何世代にもその影響が続く。アイデンティティや伝統文化の継承も紛争地域では失いがちであり、紛争後の復興の中で大きな課題となっている。



子 ども図書館の設立は、何もなかったところから始まった。子どもが最初に読む本は良質でなければいけないという考えのもと、日本で出版された絵本も活用する。また、現地で失われた文化やおはなしを現地語で出版した絵本を普及させるため、画家や作家を育てるのも重要である。自国の絵本は読み聞かせる大人も力が入り、読み手の思いが子どもに伝わることで

子どもたちは絵本に興味を持っていく。

絵本を触ったことも見たこともない子どもは、初めは逆さに持ってしまうこともあり、絵と文字でおはなしが構成されていることも理解できない。「鳥」という文字は学んでも、単語として実際に空を飛ぶ鳥を表すことに結びつかない。

そのため、絵本の『おおきなかぶ』のように犬が犬として、猫が猫として身近にいることには入りやすくても、『ぐりとぐら』が想像上の動物で服を着ていること、『はらぺこあおむし』が幼虫であることなどは、最初は理解するのに時間がかかってしまう。しかし読み聞かせを通して、子どもたちはやがて、おはなしをおはなしとして理解できるようになり、だんだん現実から離れたファンタジーも楽しめるようになる。今や『ぐりとぐら』は人気上位の絵本である。

滞在したカンボジアでは、識字教育を行うコミュニティラーニングセンターの中に図書館があり、農業技術の本などが生活向上のための貴重な情報として役立っていた。アフガニスタンでは、図書館は紛争の最中の子どもたちを癒し、幼い娘が文字の読めない母親に絵本の読み聞かせをしていた。閉じられた環境のなか、子どもたちは絵本から文字を学び、歴史や先人の知恵を学び外の世界へ知見を広げていく。絵本は、生きる力になっているのである。

日 本にいても、絵本に翻訳シールを貼付して届ける運動や、アジアの図書館のサポーターになるなど、「知る」「考える」「行動する」ことができる。紛争や貧困から脱却するための支援として、図書館や本の役割は大きい。

所蔵資料から

知識

『わたしは 10 歳、

本を知らずに育ったの。』

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会編

鈴木晶子+山本英里+三宅隆史／著
合同出版 2017年 (宮崎)



平成 30・31 年度静岡県 子ども読書アドバイザー養成講座

静 岡県教育委員会では、各市町で活動するボランティアの中から、地域の子どもの読書活動推進リーダーとしての役割を担う人材を「静岡県子ども読書アドバイザー」として認定しています。平成 30・31 年度の第 1 回目となる今回は 39 人が受講しました。今回は翻訳家の小宮由氏の基調講演「絵本を手渡すこと」について、以下に報告します。



絵 本において、絵と文はどちらが大事かと聞くと、大半の人から「絵が大事」という答えが返ってくる。しかし、本当に大事なものは文、つまりお話である。絵本は子どもが最初に出会う文学であり、芸術作品でもある。子どもが絵本で楽しんでいるのはお話で、絵だけが良くてもあまり意味がない。

もちろん絵も大事だが、子どもにとっての良い絵は大人にとってのそれとは少し違う。絵本の絵は文でもあり、子どもは絵を読んでいる。そのため、子どもにわかる絵であることが重要で、そこには作家の「分かち合いたい」という思いが込められているのだと思う。子どもは絵がわかるとうれしく思い、作家の思いも受け取る。それは人間への信頼や、肯定的に物事を考えることへと繋がる。反対に絵とお話が合わなかったり子どもにわかりにくい絵であると、わからない、おもしろくないと感じ、不信感を持つようになっていたり、本はつまらないものだと考えるようになってしまったりしてしまう。



す ぐれたお話とは何かということを考えると、瀬田貞二氏や石井桃子氏の言葉からヒントを得ることができる。それは「幼い子どもは自分を成長させている」や、「子どもにも大人にもおもしろいものが児童文学」などである。すぐれたお話を判断するには子どもの発達や絵本がどのような役割を持つかを論理的に熟知すること、子どもの感覚を持ち続けることが大切である。

なぜ本を読んだ方が良いのかという質問には、「人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみとする」という言葉で答えたい。幼い子は主人公になりきって本を読む。人種や国境を越え、人間以外のものにもなれる読書は、自分ではない他になり、自分にはないものを取り入れることができる。さらに作者の価値観や人生観にも触れることができる。どの本を子どもに出会わせるかという選書は、どんな大人になってほしいかという選択でもある。



戦 争をテーマにしたものは、文学には優れたものがあるが、絵本においては必要ないと考えている。子どもにとって、戦争は納得がいかず、ただ怖いものである。子ども時代は批判的な教育よりも肯定的なものを見せて生きる喜びを感じさせたい。逆説的、反面教師的な伝え方はしたくない。

子どもの幸せとは、喜びに満たされていること。本を通して子どもたちに理想を見せたい。現実はどううまくいかないこともあるが、理想があるから夢を持てるのだと思う。



小 宮氏の講演で印象的だったのは「子どもの心の蔵書を豊かにしたい」という言葉でした。講演会ではその他、小宮氏の祖父であるトルストイの翻訳家、北御門二郎氏から受け継いだ信念や、開所から 14 年目となる家庭文庫「このあの文庫」についてのお話もありました。

子どもに何を伝えたいのか、どのような大人になってほしいのか、そのためには選書がとても大切だということを改めて感じたお話でした。

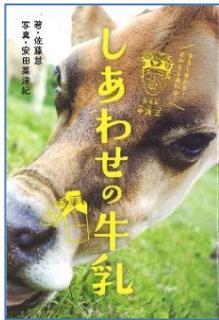
所蔵資料から

『子どもと本』

松岡享子／著 岩波書店 2015 年 2 月

子どもと本について学ぶときにまず読むとよい本として紹介されました。その他、『絵本論』（瀬田貞二／著 福音館書店）、『児童文学論』（L・H・スミス／著 岩波書店）等にある言葉も講演の中で紹介されました。（眞子）

知識



『しあわせの牛乳』
佐藤 慧／著
安田 菜津紀／写真
ポプラ社
2018年3月

岩手県岩泉市にある「なかほら牧場」。この牧場は、牛を牛舎に入れ穀物の餌を与える効率を重視した近代酪農ではなく、放牧による酪農を行っている。牧場長は、幼い頃から牛を愛し、牛に慣れ親しんできた中洞正さん。独立後も様々な壁を乗り越え「牛も人間も幸せに暮らしていける酪農」を実現した。私たちは生きていく限り、他の命を奪うことを避けられない。だからこそ自然を利用するのではなく、共に生き、何を未来へ残すか。中洞さんの取組みが問いかける。【小学校高学年から】 (安田)

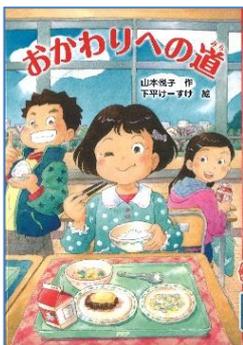
文学



『ひとりじゃないよ、ぼくがいる』
サイモン・フレンチ／作
野の 水生／訳
福音館書店
2018年3月

オーストラリアの田舎町で両親と妹、近くに住む祖母と何不自由なく暮らす11歳のキーラン。そんな日常は伯母がいとこのボンを連れてきたことで一変する。見かけも中身も変な彼は学校でいじめの標的になり、キーランもそれに加担してしまう。ボンを守ってあげなさい、居場所をつくる協力と言われるけれど、家族との時間や当たり障りなくやってきた学校生活はボンのおかげでもやもやすることばかり。しかし共に過ごすうちに次第に彼を理解しはじめる。さわやかな読後感。【中学生から】 (眞子)

文学



『おかわりへの道』
山本 悦子／作
下平 けーすけ／絵
PHP 研究所
2018年3月

先生が作るおかわり用のおむすびを一度でいいから食べたいかすみ。おかわりは早い者勝ち。食べるのが遅く、おかずの「へらし」や「おのこし」をよくするかすみは、おむすびを食べられていない。2年生の終わりも近づいた頃、かすみはおむすびを勝ち取るための挑戦を始める。

給食という身近なトピック、友だちのサポート、本人の努力、どれも共感しやすい。早く食べるための作戦があまり行儀がよいとは言えないがおはなしに障るほどではなく楽しく読める。【小学校低学年から】 (青山)

絵本



『おばあちゃんとおんなじ』
なかざわ くみこ／[作]
偕成社
2018年3月

おじいちゃんは、わたしが
おばあちゃんに似ているって
言うけど、こんなかおかなあ。

おばあちゃんと買物に出たなっちゃんは「ないしょのいいところ」を特別に教えてもらった。生垣のすきまを這って入ったところは、一面に大好きなたんぼぼが。はなかんむりを作りながら聞くおばあちゃんの小さいころの話に、おばあちゃんも、こどもだったんだね、とびっくり。

近所の風景やできごとを細かく描き、おはなしはゆっくりと進む。柔らかなタッチの絵がとても暖かい。【5、6歳から】 (宮崎)